

氷雪の富士行

廣 瀬 潔

二月二十六日（曇後晴、夕刻より強風）

早朝鎌倉をたつ。驛で深田氏と落合ひ、大船から和久田氏も加はつた。二人とも昨夜よく寝られなかつたとみえ、眠むさうな顔をしてゐる。

日曜日なので、列車は非常に混んでゐた。特に富士へ日歸りスキーに行く客が多かつた。知人の顔も四五人見えた。

「また富士へお出掛けですか」

と、私達一行の大きな荷を見付けて、すぐ察しる。

平塚邊から、富士にかゝつてゐた雲が次第に切れ出し、新雪を粧つた山肌が一部現れて來たが、國府津、山北を経て、御殿場に着く頃にはすっかり晴れ渡つて、氷雪に被はれた壯嚴な富士の全貌が澄み切つた冬空に、くつきりと浮び出た。

御殿場驛につく。歩廊に山案内の小見山正君が、例の如く元氣な顔をして迎へに出てゐてくれた。早速荷物を渡して、驛前の田口旅館に運んで貰ふ。

「どうだ、忙しいか」

「はい、この冬から氣象臺の外、陸軍の高山醫學研究所も出来ましたので、仕事が倍になりました」

「年末から一月にかけて、研究所に勤めてゐたつてね」

「はい、四、五十日滞頂してゐました」

「その後は……」

「二月はずつと野菜運びで、登つたり降りたりしてゐます」

「今月になつて、何度登つた」

「頂上へ行くのは、これが七回目です」

「相當なものだね、それでは四日に一度づゝ冬富士へ登つてゐる勘定だ」

「はい、さう言ふ譯になります」

と、軍隊口調で答へる。

數年前の冬だつたが、ある土曜の夜行に御殿場へ行くと、生憎くこの男が頂上に登つてゐた

ので、電話で頂上へ交渉すると、「では、今下りますから……」と、二階からでも下りるやうに簡単に、私が夕食を食べ、一風呂浴びてゐる間に、暗闇の頂上から御殿場迄馳下つて來たとさへあつた。

荷が多いので、この小見山君の外、今一人田代東作君といふ若い人夫を傭つて、頂上まで行つて貰ふことにした。

自動車は一行五人と荷物を澤山詰めこんだので、身動き一つ出來ない。御殿場郵便局と町外の冬期登山組合長梶房吉君の私宅によつて、頂上行の郵便物や小荷物を受取る。

自動車は裾野へ出る。沿道の樹木は春近く大分青ばんで來た。瀧ヶ原附近の草原へ出ると、右窓に籠坂峠、左窓に愛鷹連峯がよく見える。正面の富士は次第に近づいて、頂上の岩稜まではつきり見えるやうになつた。路は凹凸の激しい火山砂礫地帯なので、車が無闇に上下に揺れる。

馬返で自動車を棄て馬橋二臺に分乗して、林間の雪道を太郎坊に向ふ。馬は朝から何回となくスキー客を運んだので、汗をびつしよりかいて、脊中から湯氣を立てゝゐる。

疎林のなかは靜寂で、遠くから小鳥の啼聲が聞えて來る。樹の芽も大分膨んで、雪面に照りつける陽光も暖い。林の上から富士の頂上がこちらを覗きこんでゐる。あそこには零下三十度

に近い嚴寒が、私達一行を待ち受けてゐるのだとはどうしても考へられない。

「北海道の三月終りから、四月初めの景色だ」

和久田氏は北大在學中の山旅を想ひ出す。

太郎坊はスキー客で賑つてゐた。斜面は廣いが相變らず雪質はよくない。沼津・静岡・濱松と言つた東海道方面のスキー客が多くはいつてゐるやうだ。

茶屋で晝飯をすませ、馬橋から降した荷を整理する。

「餘り多いやうだつたら、太郎坊頂上間を二度に運ぶか」

「いや、それほどでもありません。一度でがんばりませう」

若い田代君も快諾したので、その様に荷造りしたが、一人一人の負擔は相當重かつた。荷は頂上で氷雪と闘つてゐる觀測所員への慰問食料が多く、虎屋の羊羹、舶來極上のウキスキー、野菜、果物、漬物などだつた。なかで振つてゐるのは八キロもある「花らつきよう」の樽で、「頂上に滞在してゐると、不思議に『花らつきよう』が食べたくなる」といふ岡田臺長の話もあつたので、多量持ち上げることになつたのだ。

正午スキーで太郎坊を出發する。荷が重いので、ゆつくり一步々登つて行く。一列縦隊に並んだ一行五人の異様な重裝は附近に遊んでゐる多くのスキーヤーの眼をひいた。皆立ち止つ

て私達一行を見送つてゐる。なかにはわざ／＼側までやつて来て、「寫眞を撮らして下さい」などいふのもある。

天氣がよいので、一合から双子山邊りにかけ、至るところスキヤークが遊びに来てゐた。傾斜は緩かで、陽が一杯照りつけてゐる。

「五月の立山、彌陀ヶ原のやうだ」

荷が重く暑いので、時々息をいれる。至つてのどかな風景だ。風がなく、顔がちり／＼陽に焼ける。

「このまゝ雪の上に寝轉んで終ひたいやうな氣がする」

休んでゐると、スキヤークが盛んに滑つて來るので、深田氏と和久田氏は堪らなくなつて荷を下し、アザラシをつけたまゝ一滑りする。

二合八勺迄登つて、充分休息を取る。陽が少し傾き出したので、氣温が下り、風さへ出て來た。ウインド・ジャケットを着けて出發する。寶永の斜面では盛んに雪烟が捲き初めた。アザラシを一杯きかせて直登する。山中湖もだん／＼下になつて行く。双子山も見下すやうになつた。次第に雪が堅く締つて、スキークの角付がきかなくなつた。アザラシを力強く雪面にこすりつけて登高する。もし滑つたら、一時間位かゝつて登つて來たところも一瞬で滑落して終ふ。氷雪

に埋れた小屋の屋根で、一休みする。裾野が展けて、箱根や丹澤の山々も浮び上つて来た。時突風が襲つてくるやうになる。その度に身をかどめて、やり過ぎす。雪の粒が飛んで来て、頬にチク／＼と刺さる。そろ／＼高山氣分が出初めた。

突然小見山君がクラストに踏みこんで、スキーを折つて終つた。荷が特別重かつたためだらう。スキーを替へるために同君だけが一旦二合八勺迄戻ることにし、一行は今夜の宿泊地五合五勺を指して進む。

四合附近から右折して寶永澤にはいる。澤のなかはいくらか雪が吹き溜つてゐるので、アザラシがきいて樂だ。陽が傾くと、頂上附近の氷雪面がバラ色に輝き、中腹では、雪烟が物凄く斜光のなかで躍り狂つてゐる。

夕刻になつて、氣温は急に下降し、手袋をはめた手の指さへ少し痛む位だ。それに二合八勺を出てから一度も食事を攝らないので、そろ／＼腹も空いて來た。昨夜寢不足だつた連中は特に疲れが出て、

「五合五勺はまだか」

「そら、あそこの赤い扉のある小屋です」

「見えてゐるが、なか／＼近よらない」

「小屋が『おいで〜』をしながら、段々後へ退つて行くやうだ」

と、變なことを云ひだしたのは、一番長い、重いスキーをはいてゐた深田氏だつた。

何度か立止つて息を入れながら、やうやく五合五勺の小屋に着いた時は、冬の短い日もとつぷり暮れて、青白い新月が凍つた富士の肩あたりからのぞいてゐた。ふり返ると、御殿場の灯が風のなかにまたゝいてゐる。

「ヤッホオ！」

遅れた小見山君を呼んでみたが、いつかう返事がない。暗くなると、冷い風が一段と身にしみて來た。

小屋の入口にある雪をかき出し、小さい窓から室内へ身體を流しこむやうに落す。内部は眞暗で、なにも見えない。ただ入口や窓から吹きこんだ雪だけが夜目にも白く見える。ランプをつけて、圍爐に炭火をおこす。東の窓が壊れて雪が遠慮なく室内に飛びこんでくる。炭俵で窓をふさぎ、床にゴザを敷く。炭火が盛んに青い焰を吐いてゐる。一酸化炭素が上昇するのだ。爐の上に釣つてあるランプが頻りに明滅するので、危険だと思つたが、窓から風が吹きこんでゐるので、換氣はどうやら大丈夫らしい。

小屋に着いた頃から、風が猛烈になつて來た。冬の富士では晴れ上ると、半日か一日でこの

やうな強烈な風が吹く。快晴と風は付きものだ。窓から空を見上げると、無数の星がまたゝいてゐる。時々突風がどつと波濤のやうに小屋に打突かつて来る。

半時間ほど経つたが、小見山君が登つて来ない。獨りで荷が重いところへ、日が暮れて風は強くなつたのだから、少し心配になつた。相棒の田代君に懷中電燈を持たせて、アイゼンで迎へにやる。

暫くすると、屋根に足音がして、二人の元氣な聲がした。

「御苦勞さま」

「いや、小屋から懷中電燈を照らして誰か迎ひに来るので、『来るな！ 来るな！』と呼んだのですが、風が強くて少しも聞えず、往生しました」と、往生のしどころが違ふ。

爐の上に炬燵が造られ、壓力釜の飯も炊けて、一同旨さうな音を立て、夕食を初めた。が私だけは一酸化炭素を餘分に吸つたらしく、食慾が全くなくなつたので、何も食べずに寝て終つた。食器を片付ける音も、小屋ごと浚つて行きさうな烈しい風の音も、夢うつつに聞きながら……。

夜半やはり室内にガスがこもつたと見えて、和久田氏が便所に立つた時、軽い中毒を起した。

暫く入口の雪の上に臥てゐたさうだが、他の者はよく寝入つてゐて、少しもそれを知らなかつた。それにしても實に危険だ。一酸化炭素は空氣よりいくらか軽いので、氣象臺や醫學研究所の人達は、この小屋で炭火を燃した時には、一さい立上らず、床を這つて用事を済ませるとのことだ。

二月二十七日（快晴烈風）

風が猛烈に吹いてゐる。小屋の周囲のトタンがポコ／＼音を立てる。電線を切つて行く風の唸りが喧しい。時々バラバラと砂礫と雪塊が屋根に降つて來るかと思ふと、何か固い物を打突けたやうに、ずしんと突風が小屋に當る。登山家が急斜面の氷上でこんな突風に打突かつたら、ガラスの上に留つてゐる蠅みたいに他愛もなく吹き飛ばされて終ふだらう。考へたゞけでも恐ろしい。頂上の大火口にも風が打突かつてゐるらしく、臥てゐると微かな地響が身體に傳はつてくる。

眼を開くと、天氣はいゝと見え、東の窓からまぶしい位朝陽がさしこんでゐた。風に追ひまくられた雪片が、光の中でキラ／＼舞つてゐる。一寸埃のやうに見える。蒲團も床も霜がおりたやうに雪で眞白だ。

炬燵に當りながら寝たので寒くはなかつたが、咽喉が乾いてだるい。朝食を終つたが、風が

仲々止みさうもない。頂上の観測所に電話で問合せると、三、四十メートル吹いてゐるとのことだ。一日滞在かと思つたが、九時過ぎるといくらか風いだったので、出發する。

「耐風技術の實習にはもつて來いの日だ」など、仲々強がりと言ふのも居る。

身仕度を整へて戶外へ出る。朝陽が一面に氷雪に照り返して目映ゆい。高山の清淨な朝の空氣が胸の奥までしみこむ。頂上を見上げると、手に取るやうに近い。だが、これからまだ一千メートルも登高しなければならぬのだ。富士のやうな大きな山になると、人間の距離を計る眼も案外影が淡くなる。

暫く堅雪上をスキーで登る。が六合あたりへ來ると、さすがにアザラシが言ふことを聞かなくなる。それにところ／＼岩が出て來たので、アイゼンに替へ、スキーは結束して岩に縛りつけ、明日小見山君に取りに來て貰ふことにする。

アイゼンに穿き替へてからは、脚も軽く登高がはか取る。が八合附近まで來ると、流石に空氣が稀薄になつて、軽い高山病に冒されるので、歩調は亂れる。休み休み登る。眺望は廣闊となつて、寶永山はいつか脚下に見下ろすやうになる。駿河灣が展開して、三保の松原から御前崎附近の海岸線がはつきり見えてくる。眺めがいいので、一度腰を下ろすと次に立上るのが、如何にも憶劫になる。

風が強いので、注意に注意を重ねて登高を続ける。幸ひ氷があまり堅くないので、アイゼンの爪がよく刺さつて樂だ。霧氷が割合に少い。突風時には暫く立止つて身構へするが、スクラムを組むほどではない。頂上直下で食事を攝つてゐると、朝先發した田代君が、早くも頂上觀測所へ荷を送り屈けて、降りて來た。「今日中に下山するから……」と、挨拶もそこ〜に急いで、廣い氷雪の斜面を降りて行つて終つた。見る見るうちに豆粒のやうに小さくなる。

頂上に出ると、さすがに風が烈しい。氷も硬い。が例年に比べて氷は少ないやうだ。淺間神社に參拜して、コノシロ池に出ると、最高峰劍ヶ峰頂上で、觀測所員が手を振りながら此方を呼んでゐる。馬の背から取りついて、觀測所に着いたのは二時少し過ぎだつた。

雪のトンネルをくゞつて、玄關から暖いストーブの燃えてゐる事務室にアイゼンのまゝはいる。手探りで大きな椅子に腰を下した時は室内が薄暗くてよく見えなかつたが、段々なれて來ると、髯だらけの所員の顔が一つ一つ浮んで來た。

挨拶を交はしながら、出された砂糖湯を飲む。

「えらい風だつたでせう」

「えゝ、どの位吹いてゐました」

「少し前迄平均四十メートル近くありました」

と聞かされた時は、こつちがびつくりして終つた。

夕食迄、ストーブに當りながら、椅子に腰かけたり、床に臥ころんだりして、身體を休めた。零下二十何度と言ふ嚴寒と、四十メートルの烈風で縮み上つた身體の關節が一つ一つ伸びてゆくやうな氣がした。

夕食は明るい電燈の下で所員一同と卓を圍み、西歐名曲のラヂオ放送を聞きながら、下界から持つて來た御馳走を展げ舌鼓を打つた。そんな時は、氷に埋つた嚴冬四千米級高山の絶頂にある氣象觀測所に居ることさへすつかり忘れて終ふ。

たゞ寢室は大澤側の岩頭にあつて、蒲團は充分だつたが、燃料不足のため保温装置がなく、室内氣溫零下三十度に近かつた。冷え切つた蒲團を體溫近くまで温めるには、長い間身體をガタつかせなければならなかつた。それに登頂第一夜は皆軽い高山病に冒されてゐるので、就寢の時、呼吸は荒く、動悸がして、胸苦しかつた。

二月二十八日（快晴、風幾分和ぐ）

よく寢むれた。夜明けは氣溫が最低になるので、寒いこと夥しい。息が蒲團の襟に白く結霜する。狭い三疊位の寢室に三人寢たのだが、身體から蒸發した水蒸氣が窓や天井に一杯結晶してゐる。枕元に置いた眼鏡をかけると何も見えない。その筈だ、レンズが霜で眞白になつてゐ

る。時計もガラスを拭はなければ針が見えない。

一夜ぐつすり寝たので、身體の具合はずつとよくなつた。起きて暖かい事務室に駆けつける。氷に閉ざされた二重ガラスの窓に、ほんのり朝陽が紅くさしこんでゐる。今日も晴天だ。風は昨日から見ると大分納つた。水が貴重なので朝起きて顔は洗はず、皆寝呆けた顔でストーブを圍んでゐる。

朝食を済ますと、小見山君は六合において來た一行のスキーを取りに行く。他の三人は頂上御鉢廻りに出掛ける。觀測所を一步出ると、アイゼンを下駄のやうにはき、ピッケルをステッキのやうに携へる。手袋やウインド・ヤッケは外出着として缺かされない。

海拔三千七百七十六メートル三角點のある劍ヶ峰絶巔の岩に登る。と言つても玄關から數歩に過ぎない。今では觀測所の屋根の方が三角點より高い。素晴らしい展望で、南アルプスが實に近く、そして低く見える。岩壁を傳つて、大火山に向つた急傾斜の氷雪面に出る。透き通るやうな蒼氷が岩についてゐる。朝陽が氷の中にさしこんで、それを踏んでゐるアイゼンの爪影が黒く長く氷のなかに屈折して見える。まるで黒い縞のはいつた美麗な水晶のやうだ。ピッケルで氷盤を割ると、氷片が金屬性の音を立て、火山口へ落ちて行く。大火山の縁まで行つて、底を覗いてみる。一寸足がすくむやうだ。

西安之河原から、白山岳の東南面に出た。氷の斜面が上方は急で、下方に行くに従つて緩かになり、裾は平になつてゐる。氷上技術練習に持つて來いの場所なので、アイゼンやピッケルの使ひ方を本格的に實習する。特に氷上滑落は種々雑多な姿勢で行つた上、適宜ピッケルで停止してみる。可成り高い處から滑つて、速度が加はつた時、急停止する方法をやつてみたが、スキーと違つて、相手はカン／＼の堅氷だから實習でも骨身にこたへて痛い。深田氏は餘り熱心だつたので氣がついた時には、ポケットに入れてあつた豫備のフィルムをひどく傷めて終つた。

金明水から吉田大澤の頭に出て、久須志岳に登つた。西から北にかけ、日本の中部地方にある山が一度に展開した。日光から、上越上信國境、秩父八ヶ岳、南、中央、北アルプスの連峰、妙高戸隠まで一望のうちにあつた。何しろ嚴冬の快晴だから、視界は至つて廣い。

「知つてゐる山の名を言へば、そのまゝ眼の前に見えるのだから愉快だ」

と、和久田氏は喜ぶ。深田氏は、永年に互つて親んで來た所謂「わが山々」に黙々として懐しい視線を投げかけ、頻りに「山岳展望」を楽しんでゐる。

「北アルプスは白馬の乗鞍迄見える」

「それでは日本海まで見えてゐるのかもしれない」一同緊張して眼を見張る。

吉田口頂上から北側の氷雪面を俯瞰して、そこで滑落墜死した幾多の犠牲者の靈を慰め、久須志神社に参拜した。大日岳の外側では氷上技術を實地に練磨しながら、伊豆岳に出た。成就岳の舊觀測所で休んでみると、空から飛行機の爆音が洩れて来る。見上げると、五、六千メートルあたりに小さな戦闘機が一つ健氣にも高等飛行をやつてゐる。が無限の碧空と巨大な富士山體にはさまれたその飛行機は、小さくて蚊ほどにも見えなかつた。

山體の東側から南側にかけて、一千メートル邊に雲が流れてゐた。箱根や愛鷹の上は雲海も地形通り波打つてゐるのは愉快だつた。淺間神社から三島岳を巡つて、ゆつくり劍ヶ峯へ歸ると、既に二時過ぎてゐた。所員達は晝飯を食べずに私達一行の歸るのを待つてゐたのだ、と聞かされた時は、全く恐縮して終つた。

小見山君が一行のスキーを取つて来てくれたので、食後腹減らしに山頂西安之河原へスキーに出掛けた。スキー場に行くにもアイゼン、ピッケルが必要で、向ふに到着してからスキーに替へる。西安之河原は新雪後數日たつてゐたので、風に壓縮された堅雪が少しばかり斑に残つてゐるだけだつた。そのやうな雪面はアイゼンで歩くと、爪が一杯はいる位の軟かさだつたが、スキーで滑ると、制動がきかず、廻轉の時止め度もなく流される位で危険だつた。まごまごすると、大火口底迄流されて終ひさうだ。安全な箇所を數回登つたり滑つたりして見たが、何分

空気が稀薄のため、開脚登高などすると、息がはずんで苦しい位だった。

最後に白山岳南麓の小火口底迄滑つて行つた。直滑降を飛した和久田氏は氷の斜面に飛びこんで、危く大火口の方へ流されさうになつたが、小さい氷丘に乗り上げて辛じて止めた。小火口底から戻らうとすると、スキーの角付がきかないので、スキーを脱ぎ棄て、氷の上で四つ這ひになつたが、どうしても滑つて登れないのを、上で見兼ねた小見山君が、アイゼンとピッケルを持つて迎へに来てくれた。

夜はストーブを囲み、和久田氏から特殊鋼アイゼン、ピッケルの創作苦心談を聞いた。何分にも冬富士では、私達一行は勿論、観測所員から案内人夫に至る迄、全部和久田氏が考案した門田製アイゼンをはいてゐるので、話す方も、聴く方も熱心だった。最後に和久田氏は實物を手にしながら、一つ一つその構造について、力學的の解説迄してくれたので、一同頗る満足だった。

三月一日（快晴、微風）

連日快晴で、今日は風さへをさまつた。大火口底へ降りるのに持つて來いの日だ。朝食を済すと、一行三名に小見山君を加へ、馬の脊から虎岩に下つた。更に虎岩東側の氷壁をつたつて、火口底へ向ふ。傾斜は四、五十度で、氷は堅く、アイゼンの爪は四ミリ位しか刺さらない。が

風がないので何より幸ひだ。足場を切らず、火口底に向つて直降する。連日の練習で一行のアイゼン操作が馴れて来たため、いさゝかの危氣もなく僅か數分で火口底に到達して終つた。

四圍の火口壁は頭を押しつけるやうに聳え立つてゐる。虎岩の岩峰は上からのしかゝつてくるやうだ。狭められた空は室内で天井を見上げるやうに限られてゐる。心持ちか空の色が一入濃く見える。西南の空に氷雪の劍ヶ峰が朝陽を浴びて屹立してゐる。他のどこから眺めるよりも崇高に見える。

一通り火口底の氷雪状態を調べ、歸途は氷の堅い、急傾斜の氷壁を登つて、伊豆岳頂上に出ることにした。約二百メートルの登攀に過ぎないが、氷壁は一部六十度から七十度に近いところもある。こゝは數年前一度ザイルで下降したことがあるが、登るのはこれが初めてだ。

足場を切らず、アイゼン技術を極度に使つて見たが、上部は萬一を慮つて、ザイルを使つた。ところぐアイゼンの爪先が二ミリ位しか刺さらない箇所もあつたが、時間に餘裕がある上、風はなく、一行の技術が揃つてゐたので、着實な氷壁登高を続けることが出来た。一部アイゼンを全く受けつけない堅氷に出會つたので、試みにピッケルを打ちこむと、餘り氷が硬いためか、縦横に龜裂が先走る。足場も切れず、ハーケンも使へないので、之を左に避けて登つた。伊豆岳頂上附近の岩場に取りついてからは、アイゼンのまゝ氷雪のついた岩を拾つて登つた。

かうした岩場のザイル技術については和久田氏が特に鮮なところを見せてくれた。

大火山口底への登降は、天候に恵まれたとは言へ、何分にも嚴冬四千メートル級の高山の頂なので、気温は低く氷は堅く相當緊張した氣分を味へた。

晝過ぎ和久田氏は用事のため一行と別れ、下山することゝなつたが、偶梶房吉君が登山して來たので、これと連れ立つて、歸つて行つた。

午後は、ひと月に一度あるかないかと云ふ無風状態になつたので、深田氏と、大澤側の岩壁へ出掛けた。岩登りをしたり、寫眞を撮つたりして、至つてのんきに遊んだ。

夕方西安之河原の高山醫學研究所を訪問した。入口の氷雪トンネルは滿ソ國境附近にあるトチカと同じやうな型に掘られてあつた。豫め電話をかけておいたので、若い軍醫達が玄關に出迎へ、暖い事務室に案内してくれた。軍醫達は私や深田氏などと同じく東大出で、しかも深田氏の小説や、私の冬富士について書いたものなども前に読んでみてくれたので、すぐ親しくなつた。山では珍らしい茶菓の饗應を受けながら、高山醫學や氷雪に埋れた山小屋の換氣状態などについて、二時間ばかり雑談して歸つた。

夕食後はまた暖い事務室で、觀測所員から高山氣象の話など聞いた。觀測技手の一人は最近まで暑い南洋諸島に働いてゐた人で、内地に歸ると、間もなくこの嚴冬の富士へ登つて山頂觀

測所に勤務することになつたのだと言ふ。この位寒暑と高度に差のあるところで生活することを餘儀なくされる人も少いだらう。

「私達は熱帯や寒帯、海洋や高山に生棲する一種の兩棲動物みたいなものです」と、聞かされた時には、氣象觀測者の竝々ならぬ勞苦のほども充分察しられた。

また觀測主任の大和順一氏は最近迄出征してゐて、戰車隊長として南京攻略戦に参加した人だつたし、深田氏も矢張り從軍文士として、數ヶ月前漢口攻略戦に加はつたことがあるので、さうした方面の戦さ話で賑はつた。

夜の無電がはいつた。冬としては珍らしい七百四十八ミリの低氣壓が土佐沖に現れ、東北に進んでゐるとのことである。この低氣壓のため天氣は下り坂となつた。

「今夜は雪かもしれない」

「いや、もうチラ／＼やつて來た」

觀測に出た技手が戸外から歸ると、電燈の下で、ヤッケについた雪片を調べてゐる。

「風がないから積るだらう」

「明朝は頂上からスキーで滑れるかも知れない」

「出發の時言つてた冗談が本當になりさうだ」

観測所の人々は固唾を飲んで、私達一行の滑降して行く姿を上から見守つてゐる。馬の背から三島岳の安全地帯へ出て、ザイルを脱し、ピッケルを兩杖に替へた。それから一気にコノシロ池に直滑降を飛ばすと、観測所員一同が手を振つて私達の前途を祝福してくれる。

下山は不淨澤を降ることにした。不淨澤は頂上成就岳と伊豆岳の中間から眞東に出た大きな澤で、私の見聞では富士山で最も優れたスキー滑降路だ。冬期富士が西の季節風を受ける関係で、この不淨澤は頂上附近まで粉雪が堆積してゐる。降雪直後は勿論、二、三日たつて、ほかがテラ／＼の氷となつた頃でも、この澤だけはどうやらスキー滑走の出来ることが多い。

不淨澤の頭に出ると、四十度に近い急傾斜の氷上に新雪が積つてゐた。トラバースの際短スキーは浮力が少なかつたためか、スキーで切つた線から小さい表層新雪雪崩を起し、私はこれに捲きこまれて終つた。が間もなく下方の巖石にぶつかつて、身體の滑落して行くのは止つた。

危険なので、再び深田氏とアンザイレンして、ピッケルでいち／＼確保しながら、慎重にスキーを取扱つた。二百メートルほど下りると、深い粉雪となつた。そこからは安全にスキーの滑走が出来る。再び兩杖に替へ、深田氏は長スキーで三十何度の傾斜面に、美事な連続クリスチャニアを描き粉雪を浴びながら、滑走に滑走をつゞけて行く。私は大きく斜滑降をしながら、おゝまかな廻轉でそれを結んで行く。

小見山君もアイゼンをスキーに替へたが、何分にも荷が重く、二十キロ以上もあるので、よほど骨が折れるらしい。いつも重い荷を背負つて、一行の後を追つて来ては、随時食料装衣雪具の補給をする「我等の母艦」小見山君の労苦も一通りでない。お蔭で私達一行がこんなに自由自在に活躍出来るのだ。

不淨澤は廣い。最初は百メートル位の幅だが、中腹は五百メートル、裾は千メートル以上もある。澤のなかには岩石や斷崖はない。廣漠とした一面の雪野原だ。スキーは先の向いた方にくらでも突走る。申分のない深い粉雪で、スキーが雪面下に潜つてゐても、少しも抵抗を感じない。

「まるで雲のなかを滑つて行くやうだ」

深い粉雪のなかでスラロームをつゞけて行く時、少し前傾が過ぎると、短スキーは浮力を失つて忽ち深く先を突込み、身體は前のめりに投げ出されて終ふ。

滑走すると、盛んに雪煙が上るので、前進して来る時はお互によく見えるが、行過ると忽ち雪煙のなかに姿が消えて終ふ。丁度廣い洋上を驅逐艦が煙幕を張りながら走つて行くやうだ。

スラロームをやりながら、身體を左右交互に内傾すると、廣い雪の斜面が飛行機に乗つた時のやうに、大きく左右に揺れる。突然富士が裾野の方から浮き上つて、滑つて行く前方の斜面

が、急に眼の前に近く直立して来た。はつと気がついた瞬間、頭を雪のなかにつつこんで、顔面制動をやつてゐた。傾いたのは富士の斜面ではなく、滑つてゐる自分の身體だつたのだ。

一度停止して、あたりを見廻す。まだ八合を少し下つたばかりだ。安心してまた滑走に、滑走をつゞける。餘り障害物が無いので、むしろ單調な位だ。眠氣さへ催す。終ひにはスキーが走つてゐるのか、停つてゐるのか解らなくなる。

五合邊り迄下りて来て、ゆつくり休む。すつかり晴れ上つて、朝陽が澤一杯照り出した。頂上からスキーで滑つた跡が或は蛇行線狀に、或は電光型に、銀絲を垂らしたやうに光つてゐる。

「日本にこれだけの廣さと傾斜を持つたスキー場はない」

深田氏は嬉しくてたまらないと言つたやうな顔付をする。

頂上は風が出たと見え、雪煙が盛んに舞つてゐる。

「出發が二時間遅れたら、劍ヶ峰絶頂からは滑れなかつたであらう」

「本當にきはどいチャンスだつたのだ」

十時半不淨澤を出て、山體東面を斜滑降して、寶永澤に出た。更にいくつかスラロームの跡を残して、四合附近から寶永東面に移る。風のため縞になつた雪上を、深田氏は巧みにエル・エス・テイーで下つて行く。私は一本大きく双子山へ方へ一キロメートルばかり斜滑降を飛ばし

た。波状雪の上を短スキーが飛魚のやうに走つて行く。波頭はザラメ雪となつてゐるので、スキーの當りが頗る爽やかだ。一度方向を轉じて眞直ぐに二合八勺の小屋へ滑りこむ。

屋根に腰を下して見上げると、深田氏は小刻みに波状雪を滑つて来る。小見山君はまだ見えない。スキーを脱いで陽に乾す。スキーの裏面についた凍氷を掻き落し、滑るやうにレコードを厚く塗つてゐると、皆揃つたので、陽なたぼつこをしながら、ゆつくり食事を攝る。太郎坊が眼の下に見えるが休日でないからスキーヤーは一人も居ない。

二合八勺からザラメ雪の上を太郎坊に向つて、直滑降を飛ばす。スキーがザアアア音を立てる。斜面が緩くなつたので、長スキーの深田氏がぐんぐん抜いて行く。兩杖を使つて同氏の後を追ひかけるやうに太郎坊へ滑りこんだのは正午だつた。

静かな小屋で久しぶりにサイダーを飲んだり、菓子を食つたりしてゐる間に、小屋番が氣をきかしてスキーにパラフィンを塗つてくれた。お蔭でそれから馬返まで、濕つた雪の上を一氣に飛ばせた。

朝頂上を發つ時、有線電話で豫め御殿場警察署に通じておいたので、馬返には自動車を迎へに来てゐた。が私は馬返から下も、雪のつゞいてゐる限り滑つてみることにした。道の雪は春の陽光で消えかゝつてゐたので、ところどころ路傍の林間に残つた雪を拾つて、滑走をつゞけ

た。しかし五本松まで来ると、それさへ出来なくなつたので、初めてスキーを脱いだ。丁度一時だ。地圖を展いて見ると、海拔八百三十一メートルとなつてゐる。劔ヶ峰絶頂から高距二千九百四十五メートル滑つたことになる。残念ながら三千メートルには、僅かばかり足りなかつた。

荷の重い小見山君が後から追つかけて来るのを待つ間、路傍の砂地に腰掛けて、松林の上に聳えてゐる富士を眺めてゐた。先刻滑つて降りた不淨澤や寶永澤が手に取るやうにはつきり見える。

(附記) この富士絶頂からのスキー滑降は、その滑降高距と共に計らずも山岳スキー界の最高記録となつたが、これは本文中にも記述してある通り、三月一日夜から二日にかけて、偶々冬としては珍しい七百四十八ミリの可成り強い熱帯性低気圧が土佐沖に現れ、東海道沖を東北東に進行したため、富士山に稀有の大雪を降らせ、しかも特種の気圧配置から山頂が無風状態に陥つたので、氷上にかくも多量の積雪を見た譯で、丁度その時滞頂待機中だつた私達一行がそれに乗じ、雪が風で飛ばされないうちにスキー滑降を決行したもので、絶頂から常にかうしたスキー大滑降が出来る譯ではない。

現に二十年來氷雪の富士に通つてゐる私も、こんな高距(約三千メートル)を滑つたのはこれが最初で、大正十三年二月七合附近から御殿場驛迄高距二千五百メートル、昭和十年二月不淨澤頂上直下から馬返迄高距二千六百メートル滑降出来たのが是に次ぎ、其他は新雪直後五合附近から、普通三合附近か

ら、太郎坊又は馬返迄高距千メートル乃至千五百メートル滑降出来ればいゝ方で、稀には雪が堅くスキーなど思ひもよらず、絶頂から太郎坊又は馬返迄高距二千七百メートル、アイゼンで下降することさへあつた。吉田口も、新雪直後なら吉田大澤を八合附近から、普通は五合以下の森林帯を裾野迄スキーが使へる。尙今回使用した私の短スキーは一・七〇メートル、深田氏の長スキーは二・〇七メートルであつた。

氷雪期富士登山史

一、明治二十五年五月、ウエストン氏（わが國の近代登山の先驅者）はフォーダム氏と共に、御殿場から登頂を企てた。その際同行した三人の人夫は、その不可能を豫言して六合目の小屋に留つたが、豫言を裏切つてウエストン氏等は遂に頂上を極めた。ついで同年十二月、更に大宮口から寶永山火口附近まで登高を試み、翌年五月には再び大宮口から登頂して御殿場に下つた。

二、明治二十八年二月、野中至氏が單獨にて登頂。同年秋から冬にかけて八十二日間滞頂。その間に野中氏夫人の登頂、有志の訪問登頂あり。十二月二十一日、野中氏救難登山隊が登頂した。委しくは本文の「寒中滞嶽記」を参照されたい。

三、明治三十五年一月、富士講行者村石伊之助氏が強力高田治助と共に、須走口より登頂。

四、明治四十年一月、筑波観測所長佐藤順一氏、氣象観測の目的を以て御殿場口より登山、稀に見る好天氣と絶好の氷雪状態に恵まれて頂上に達した。本文「寒中登山記」参照。

五、明治四十二年一月、雑誌「探検世界」社が冒險的精神を發揮するため、御殿場口から團體登山を計畫した。種々雑多の職業人から成る一行四十七名で、隊員の統制を缺き、加ふるに天候悪化のため、團體登山の中止を餘儀なくされたが、大北聰彦氏他七名は頂上に達した。

六、明治四十五年一月、水島長次郎氏は御殿場口より頂上を極めた。尙氏はその後大正八年まで約十回に互つて登山を試みてゐる。

七、明治四十五年一月、日本力行會員で熱烈なキリスト教信者の長谷川阮一氏は、前年十月より數回に互つて御殿場口から登山を試み、遂に頂上に達した。宗教的試練として極端な苦行をしたが、同年二月の單獨登山にて雪崩のため横死、死して尙聖書を手を握つてゐたといふ。

八、大正三年一月、日本山岳會員角倉邦彦氏は御殿場口からスキーにて登山し頂上を極めた。富士のスキーは明治四十三・四年の交から、奥國人技師クラッセル氏、同國陸軍少佐レルヒ氏等によつて試みられ、その後、レルヒ氏は八合目まで達し、鶴見宣信氏等の高田將校團、金井勝三郎氏一行等のスキー登山があつたが、いづれも頂上を極めることは出来なかつた。

九、大正中期から末期にかけて一時衰頹時代を見たが、昭和に入つてから、再び冬の富士が盛んになつてきた。既に一般冬季登山術の進歩は用具の完備と相俟つて、登頂する人が多くなつた。その代表的なものとして、昭和六年年末から七年初頭にかけて約二週間、京都帝大旅行部今西錦司氏他九名の大澤口登山は、ヒマラヤ登高の型式を倣つた革新的登頂であつた。(廣瀬潔氏の「氷雪期富士登山の文化史的考察」に據る。)